



**Data**

監督: 橋本一  
 脚本: 河原れん  
 出演: 柳楽優弥/田中泯/永山瑛太  
 / 玉木宏/阿部寛/瀧本美  
 織/津田寛治/青木崇高/  
 辻本祐樹/浦上晟周/芋生  
 悠/河原れん/城桧吏

## 👁️👁️ みどころ

大谷翔平もすごいが、葛飾北斎もすごい！世界で一番有名な日本人アーティストは、90年の生涯で3万点以上の作品を描いたが、その生きざまは？

まずは、時代背景が大切。徳川の文化文政時代は町人文化が花開いた時期。そう思っていたが、意外や意外、ヨーロッパのルネサンスとは大違いで、幕府による表現の自由への規制は相当厳しかったらしい。そんな中、アーティストの才能を見出し発掘していた、稀代のプロデューサーの役割は？

才能は、才能とのぶつかり合いの中、ライバルとのぶつかり合いの中で生まれるもの。本作前半ではそれをしっかり確認し、後半では、老いてなお“表現の自由を守ることに命を懸けた北斎の生きざまを確認したい。“伝記もの”ながら、大いに楽しめかつ勉強になった本作に拍手！



## ■□■葛飾北斎は世界で最も有名な日本人アーティスト！■□■

2021年4月11日のオーガスタでの松山英樹選手の日本男子初のメジャー優勝にびっくりなら、さる6月6日の全米女子オープンで見た笹生優花と畑岡奈紗という日本人同士のプレーオフと、笹生優花の「19歳351日」での史上最年少優勝には、さらにビックリ。“国力”も“知力”も“財力”も落ちてしまった今の日本だが、まだまだ捨てたものではない！そんな希望をもつことができたが、あなたは世界で一番有名な日本人アーティストが誰か知っている？それは、90年の生涯で描いた作品3万点以上、孤高の絵師葛飾北斎！そのことは、ゴッホ、モネらに影響を与え、米LIFE誌の「この1000年で最も偉大な功績を残した100人」にレオナルド・ダ・ヴィンチなどと並び、日本人でただ一人、葛飾北斎が選ばれていることから明らかだ。

私は、新藤兼人監督の『北斎漫画』（81年）を観ていないが、朝井まかての原作をTV

ドラマ化したNHKの『眩(くらら)～北斎の娘～』を興味深く観たので、葛飾北斎とその娘・眩(くらら)の活躍ぶりはよく知っている。したがって、本作は必見だが、気になるのは、柳楽優弥と田中泯がダブル主演すること。この2人で青年期と老年期を演じ分けるそうだが、そんな戦略の成否は？

柳楽優弥は是枝裕和監督の『誰も知らない』(04年)、『シネマ6』161頁)で、カンヌ国際映画祭最優秀男優賞を日本人初、史上最年少で受賞したことで一躍有名になったが、その後は、鳴かず飛ばず(?)、伸び悩み状態(?)が続いている。他方、ダンサーだったという田中泯は、『たそがれ清兵衛』(02年)、『シネマ2』68頁)以降、次々と出演作を増やし、直近の『いのちの停車場』(21年)では、誕生日が3日しか違わない吉永小百合の父親役として抜群の存在感を見せていた。そんな2人の俳優が演じる葛飾北斎の“連続性”は？この手の映画は伝記映画になってしまうと、面白さが損なわれてしまうものだが・・・。

## ■時代は？絵師の身分は？プロデューサーは？■

16～17世紀のヨーロッパに“ルネサンス”があったように、日本の徳川時代にも、浮世絵や歌舞伎、遊郭を中心とした町人文化が花開いた、“文化文政の時代”(1804年～1830年)があった。北大路欣也扮する徳川家康は今、NHK大河ドラマ『青天を衝け』の冒頭で“ガイド役”をしているが、徳川300年間を貫いた「土農工商の身分制度」を確立させたのが、この家康。そのため、徳川時代では、町人はいくら金を持っていても身分は低かったし、浮世絵師や歌舞伎役者には今風の“アーティスト”という称号は与えられず、下の下の身分。私はそう思っていたが、本作導入部を見ると、意外にそうでもないらしい。

本作前半の主人公は葛飾北斎ではなく、絵や本の版元であり、出版販売もしている耕書堂の店主、蔦屋重三郎(阿部寛)。彼は、「ルネサンスの三大発明」たる、火薬、羅針盤、活版印刷術の一つである活版印刷によって、日本でも当時実用化されていた浮世絵の版元として大いに稼いでいたらしい。質素を好む幕府や武士たちは、浮世絵のようなエロチックなアートは世の秩序を乱すものとして排斥しようとしていたが、所詮男も女もスケベな動物。蔦屋がいま最も重宝している、美人画のアーティスト・喜多川歌麿(玉木宏)の絵は飛ぶように売れていたらしい。すると、本作導入にみる蔦屋は、当大稀代の敏腕プロデューサー！？

そんな位置づけだが、ある日、蔦屋の屋敷にお上の家宅捜索が入り、店に並んでいた作品はすべて焼却処分されてしまったから、さあ大変。そんな中、蔦屋は「今日、俺の家に捜索が入ったのは、俺が最も『出るクイ』だったからだ」と自画自賛し、「お上の規制などクソ喰らえ」とばかりに、“表現の自由”に固執し、更なるアーティストと更なる商品開発に挑む決意を固めていたから立派なものだ。そんな蔦屋はある日、才能を秘めた葛飾北斎(柳楽優弥)の作品を見て、一目で心を奪われたが・・・。

## ■歌麿、写楽、馬琴 vs 北斎。男たちの葛藤は？■

6月15日のTVと新聞は、一斉に去る5月30日に小林亜星が88歳で死去していたことを報じた。私たちは阿久悠、筒美京平、中村泰士、なかにし礼達に続いて昭和から平成にかけての大衆音楽を彩ってきた巨星、才能を次々と失ったことになったから残念。しかし、浮世絵や歌舞伎、遊郭などの町人文化が開いた“文化文政の時代”の江戸の町には今、蔦屋がプロデュースするアーティスト・歌麿が全盛期を迎える中、新たに彗星の如く現れた東洲斎写楽（浦上晟周）が異彩を放っていた。努力するのではなく好きなものを好きなだけ描いていく、それができれば一番いいが、写楽にはそれができるし、それ以外の絵は描かないらしい。それを聞いた歌麿が嫉妬したのは当然だが、それによって自己を失ってしまうほどのショックを受けたのが北斎だ。蔦屋から「なぜ絵を描いているのか？」と聞かれても言い返せない自分の未熟さに腹立たしいのはもちろん、歌麿から「おめえの描く女には色気がない」と一方的に切り捨てられてしまう始末だった。さらに、自分はせっかくの蔦屋からの誘いに応じなかったのに、近時、蔦屋から重宝がられている写楽から「何かお気に障りましたか」とやんわり、上品に、しかも真正面から問われると、北斎に返す言葉がなかったのも当然だから情けない。

“巨星、小林亜星墮つ！”その報を受けて「密かに彼をライバル視していた」と告白(?)したのが、“浪花のモーツァルト”ことキダ・タローだ。小林亜星がレナウンの「ワンサカ娘」や「日立の樹（この木なんの木）」等で大ヒットを飛ばしたのなら、俺だって「とれとれピチピチカニ料理～」のフレーズが印象的なカニ道楽のCMソングが大ヒット。たくさんの素晴らしい芸術作品は、そんな多彩な才能の競い合いと男たちの葛藤の中から生まれてくるものなのだ。

しかし今、蔦屋が最員にしている遊郭の大広間で開催している「チーム蔦屋」の宴会の席で、歌麿は江戸中にその名を轟かせていた花魁の麻雪（芋生悠）といい仲になりながら仕事に励むと宣言していたし、彗星の如く現れた天才・写楽も、自分流の「頑張る宣言！」をしていた。ちなみに、北斎には耕書堂に身を置く物書きの瑣吉（のちの滝沢馬琴）（辻本祐樹）がおり、彼は誰彼となく至る所で衝突を繰り返す北斎に対して心のこもったアドバイスをしていたが、さあ北斎は？

北斎が子供の時の名前は勝川春朗。腕は良いが描きたいものしか描かず、描きたい時は気が済むまで描き続けるサマだから、人付き合いはまるでダメ（性格が悪い?）。その挙句、兄弟子を殴って師匠から破門にされ、食うことすらままならない生活を送っていた中、せっかく蔦屋から「俺のところ来い」と誘われたのに、それも拒否。そして今、遊郭の大広間の中で自分の席を失い飛び出してしまったのだから最悪だ。一人ぼっちの彼を応援する者は、今や1人もいない。アーティストはファンや支援者を持ってこそその価値。そう考えると、せっかくの北斎の才能もこのままでは埋もれたままで終わることに・・・？

## ■□■美人画より波と富士を！俺は俺の描きたいものを！■□■

私は大学1回生の正月に、1人で石川県にある内灘の海に行ったが、それは五木寛之の小説『内灘夫人』（69年）を読んだことがきっかけだった。もっとも、愛媛県松山市に生まれた私は、住居は市内の中心部だったが、電車で20分ほどの梅津寺（ばいしんじ）海水浴場には何度も通っていたし、母方の両親は郡中という伊予灘の海沿いにあったから、海と遊ぶのは大好きだった。そんな私には、失意のまま旅に出た北斎が今、目の前に広がる圧倒的な海の迫力や波の音、潮の香り等を描きたいと考え、それを砂浜に描き殴った北斎の心境がよくわかる。私もあの時、誰もいない海辺に大きな字で「○○、△△」と書いたことを今でもよく覚えている。アーティストの北斎にとって、それがアートの転機になったらしいからすばらしい。自分の感じるままに海と砂浜を描いた「江島春望」を持ち帰って江戸の蔦屋に見せると、彼の反応は？

北斎のそこでの言葉は、「ただ描きてえと思ったものを、好きに描いただけだ。いらねえんなら、言ってくれ」だったが、それは以前のように不貞腐れたものではなく、自信に満ち溢れていたから、それを「稀代のプロデューサー」である蔦屋が見逃すはずはない。蔦屋の「おめえ、やっとなけたな」の言葉は北斎にとって何とも嬉しいものだった。残念ながら、北斎の開眼を見届けたかのように、その数日後蔦屋は急逝してしまったが、北斎のその後の海と波を中心に描く活躍は？

ちなみに、やっとな「俺は、美人画よりも波と海を」、「俺は俺の描きたいものを」と自分の絵に開眼した北斎は以降、海と波をテーマにした絵で次々とヒットを飛ばすことに。さらに、北斎は、武家出身の戯作者・柳亭種彦（永山瑛太）と出会ったことで、2人のコンビの作品も快進撃を続けることに。この種彦の戯作（小説）は、北斎が描いた挿絵付きの妖怪話だから、今風に言えば、新聞や週刊誌の挿絵付きの連載小説だが、その物語の面白さと挿絵との絶妙なマッチが大人気を呼ぶことに。

## ■□■68歳で脳卒中を克服！娘と旅へ！創作意欲は？■□■

葛飾北斎は徳川家康と同じように、年を取るにつれて健康に留意したらしい。そんな甲斐あって、彼は68歳にして脳卒中をお手製の薬で克服したというからすごい。

他方、本作は私が心配したように、後半からは“伝記モノ”になってしまうが、それでも荒れ果てた家の中で北斎（田中泯）の創作意欲は衰えず、娘のお栄（河原れん）や弟子たちと共に充実した日々を送っていた。種彦との共同作業は今も続いているからそれもすごいが、種彦が新しく出した「修紫田舎源氏」は若者の間で人気を集めたそうだから、2人の読者リサーチ能力は、蔦屋がいなくなっても的確だったようだ。

さらに、北斎は脳卒中を克服した後、右手に痺れが残ったものの、それでも「病にかかった今だから、見えるものがきつとあるはずだ」と種彦に述べ、娘のお栄を残して一人旅に出かけたから、それもすごい。そして、今度は、海の遙か先に見える富士山や、峠道の頂上でご来光を受けて紅く染まった富士山を目に焼き付け、それをモノにしようとするこ

とに！そんな中で生まれた作品が「富士越龍」、「赤富士」等だが、その出来栄は？

## ■□■表現の自由を守れ！その戦いは？その結末は？■□■

葛飾北斎の作品では、第1に「富嶽三十六景」が、第2に「男浪」、「女浪」が、第3に「赤富士」が有名。しかし、本作後半のテーマになる「生首の図」を知っている人は少ないのでは？これは、柳亭種彦が非業の死を遂げたことを受けて北斎が描いたものだが、こんな絵を描いて大丈夫なの？老年期の北斎を主人公とするクライマックスでは、その顛末、すなわち、徳川の文化文政の時代を生きた葛飾北斎の、“年老いてなお盛んな表現の自由を守れ！”の戦いが描かれるので、それに注目。2021年6月23日現在、大リーグの大谷翔平は6試合連続ホームランを放ち、ホームラン数でトップに並んだうえ、3度目の週間最優秀選手（MVP）に選ばれるなど、絶好調！投手としても既に3勝を挙げているから、“二刀流”は絶好調だ。しかし、本作のスクリーン上では、年老いた北斎の創作と反権力闘争との“二刀流”に注目！

北斎の挿絵とセットにした種彦の戯作は人気を博していたが、それは北斎が老年期に入ってからなお続いていたからすごい。しかし、今の幕府は、歌麿の美人画もエロチックすぎるとして規制し、歌麿も逮捕される事態となっていたから、その規制は昨今の香港以上・・・？そんな状況下、種彦は読本「修紫田舎源氏」を上梓し、若者の間で人気を集めていたが、同時にそれは市井の風紀を乱すものとみなす幕府から厳しい処分を受ける行為でもあった。柳亭種彦の名前でヒットを続けている戯作の作者がレッキとした武士であることがバレたら、一体どうなるの？そのことにうすうす気付いている幕府配下の武家組合“小晋請組”の組頭・永井五右衛門（津田寛治）が調査を進めていくと・・・。

今や香港の「表現の自由」はすっかり失われてしまったが、2021年6月に大阪のシネ・ヌーヴォー等で開催される2021年の第5回香港インディペンデント映画祭では、香港理工大学のキャンパス内で、学生たちと警察が対峙する姿を描いたドキュメンタリー映画『理大囲城』が上映される。しかし、本作に見る種彦の命運は？そんな悲しいストーリーを知った上で、映画北斎が描いた、「生首の図」をしっかりと鑑賞したい。

2021（令和3）年6月25日記